

c 入舟遺跡出土の手形付土版と足形付土版

はじめに

本稿で紹介する手形付土版と足形付土版は、入舟遺跡の1995年度発掘調査区の西端（図2）にあたるT35・T37・U36・V36各Grid I層から散在して出土したものである。I層は近世における整地の際の攪乱層とみられる。両土版の時期は周辺から多数出土した余市式土器の盛行期とみられる。この貴重な出土例について紹介し、あわせて若干の考察を加えてみたい。

入舟遺跡出土の手形付土版

入舟遺跡から出土した手形付土版のうち、右手（写真29、図22-2）の土版はV36Grid I層からの出土で、長さ14.0cm、幅 8.8cm、厚さ 1.5cm、重さ(157)gで、人差し指の先端を若干欠いている。色調は、にぶい褐色で版面に黒褐色の部分がある。胎土には、長石・石英が含まれている。手を土版に押し付けた後に調整した痕跡があり、それが顕著なのは小指の部分であるが、他の4本の指とのバランスを考えると実際の小指の長さよりも非常に短くなっている。これは、中指や薬指先端に盛り上がり部分があることから、小指の先端部分を棒状工具の側面で、縁を調整した結果と考えられる。人差し指については、残存部分に調整痕は無く、親指も押し付けたままの状態と見られ、指の形がはっきりと付いている。掌の中央下部に貫通孔があり、版面から刺突具で回転するようにして広げたようである。

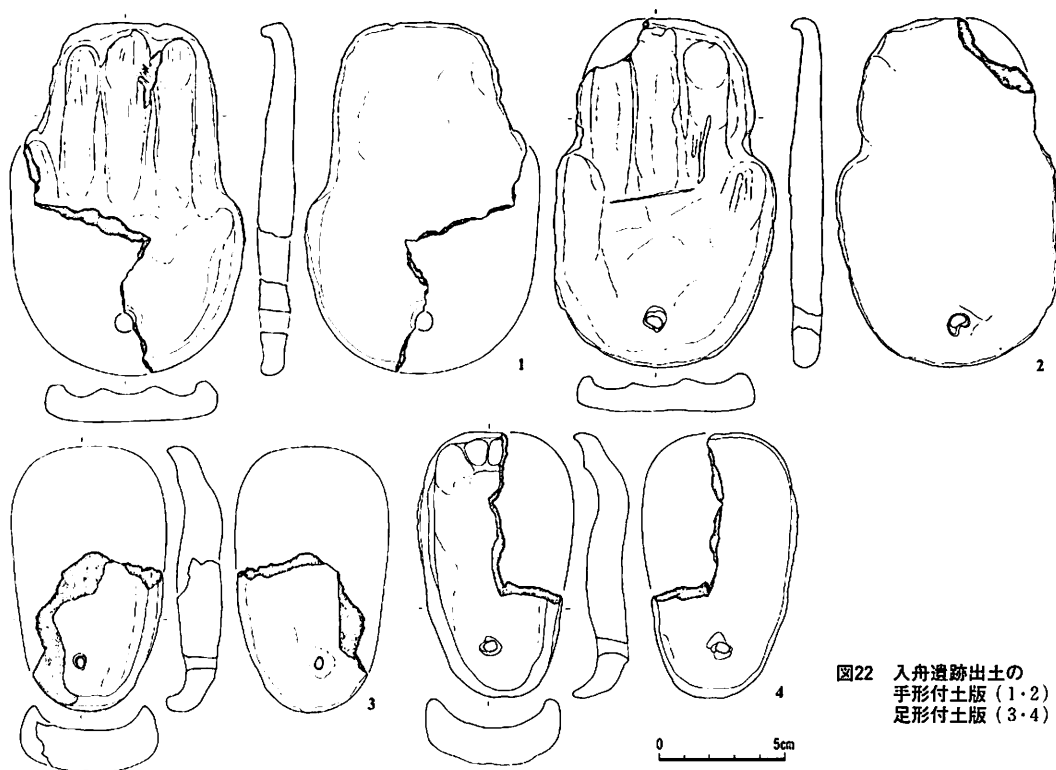


図22 入舟遺跡出土の
手形付土版（1・2）
足形付土版（3・4）

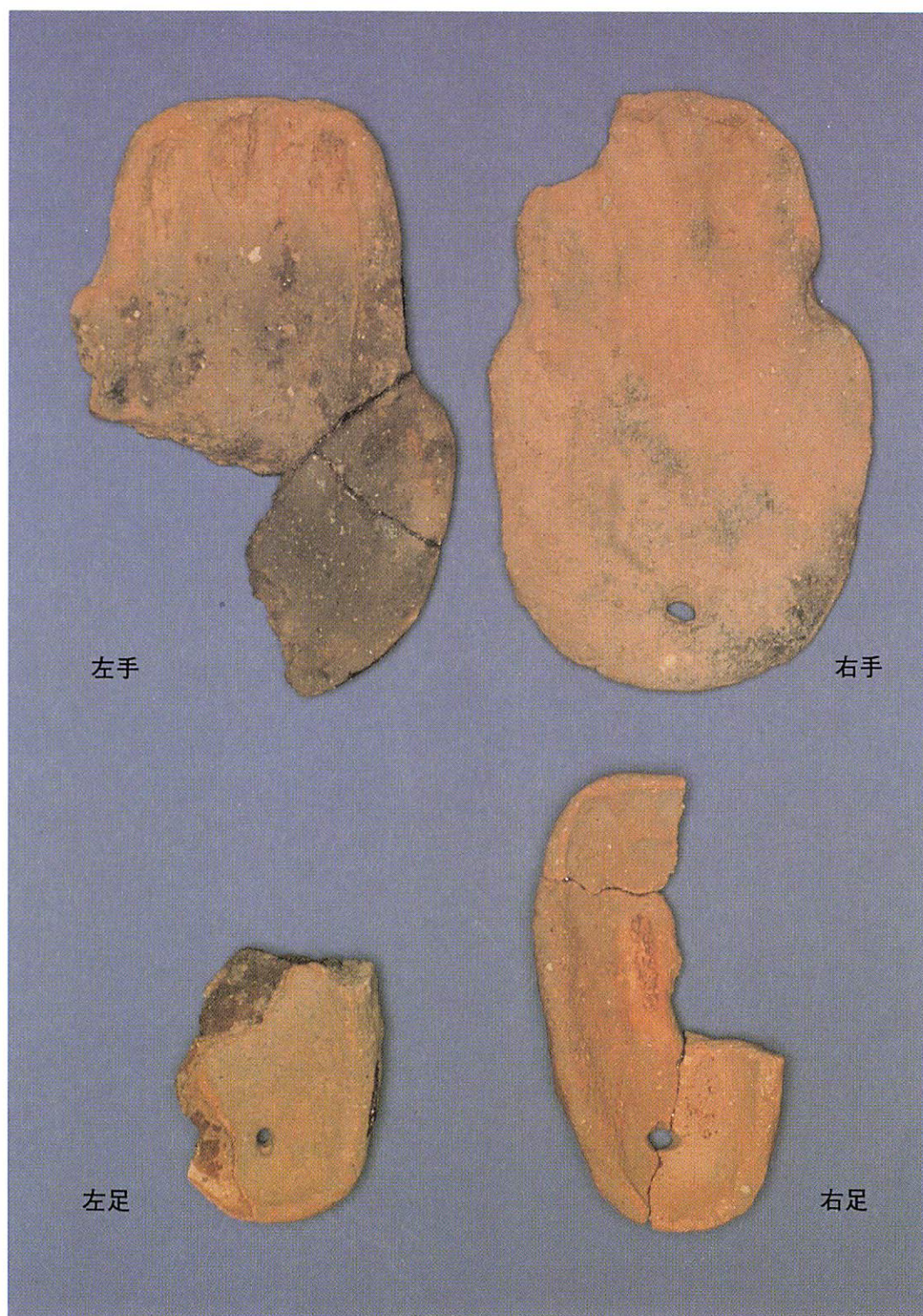


写真29 入舟遺跡出土の手形付土版と足形付土版

左手(写真29, 図22-1)の土版はT37Grid I層からの出土で、長さ(13.7) cm, 幅(8.4) cm, 厚さ1.6 cm, 重さ(133) gで、小指の中程から掌の半分程度を欠いている。色調は、にぶい黄褐色で版面に黒褐色の部分が広がり、伏せた形での焼成の結果とみられる。胎土にも、右手の土版と同じように長石・石英が含まれている。人差し指・中指・薬指の指先に、棒状工具で何回か調整した痕跡があり、これも右手の土版と同じく手を土版に押し付けた後に調整したもので、実際の指の長さよりは若干長くなっているものと考えられる。親指と小指は、調整痕は無く、押し付けたままの状態に近いとみられる。右手の土版とほぼ同じ位置に貫通孔があり、残存部分を観察すると、こちらも版面から刺突具で、回転するようにして広げたようである。

この2点の手形付土版を比較してみると、大きさや形状などが近似している。8歳~10歳位の男の子の両手の土版とみられ、同時期・同一人物のものであるとみてよいだろう。

入舟遺跡出土の足形付土版

入舟遺跡から出土した足形付土版のうち、右足(写真29, 図22-4)の土版はU36Grid I層からの出土で、長さ10.5cm, 幅(5.4) cm, 厚さ(1.5) cm, 重さ(72) gで、薬指と小指の部分から足形の中程まで1/4強を欠いている。色調は、版面がにぶい褐色、裏面がにぶい黄褐色である。胎土には、長石・石英が若干含まれている。土版に足を押し付けたままの状態であり、調整痕はみられない。踵の中央部に貫通孔があり、版面から刺突具で孔を広げている。

左足(写真29, 図22-3)の土版はT35Grid I層からの出土で、長さ(6.3) cm, 幅(4.7) cm, 厚さ(2.0) cm, 重さ(51) gで、踵付近(足形全体の3/8程度)のみの出土である。色調は、版面・裏面ともににぶい黄褐色である。胎土にも、右足の土版と同じように長石・石英が若干含まれている。こちらも土版に足を押し付けたままの状態であり、調整痕はみられない。右足の土版とほぼ同じ位置に貫通孔があり、版面から刺突具で孔を広げている。

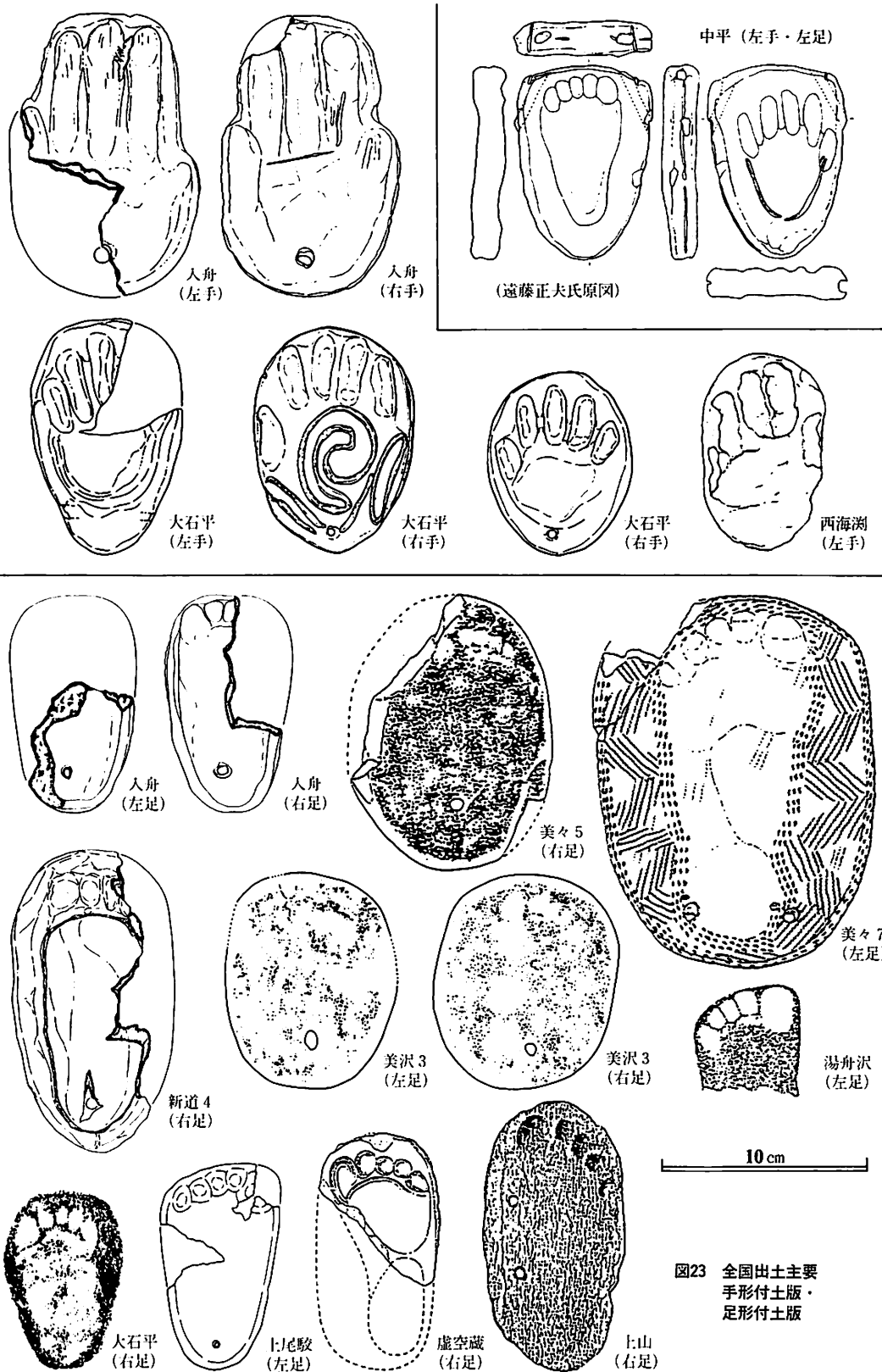
この2点の足形付土版についても、前述の2点の手形付土版と同じように、大きさや形状が非常に似ている。こちらは1歳~2歳の男の子の両足の土版とみられ、同時期・同一人物のものであるとみてよいだろう。

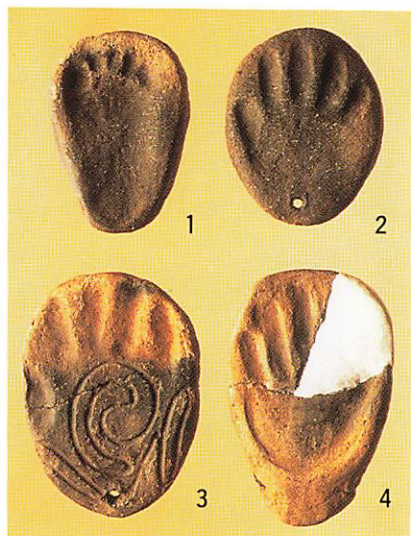
手形付土版・足形付土版の製作目的・用途をめぐる疑問

全国的規模で発掘調査が推進されている今日、少ないとはいえ当該資料も着実に増加している。足形付土版の類例が非常に少なかった時点(大型の当該資料が出土していなかった時点)での製作目的や用途については、立ち祝いを中心とする慶事・祭時等の際に用いられた。つまり、縄文時代のひとつの通過儀礼を示す具体的な遺物であると解することで事足りた。

しかし、その後、美々7遺跡他で大型の足形付土版が出土したことや、手形付土版の類例が増加してきたこと等を加味すれば、当該資料を限定して考えることが困難になってきたといえよう。出生~死に至る、さまざまな局面での通過儀礼を考慮しなければならないだけでなく、成功・失敗・病気・魔除けその他にも、さまざまな可能性があるだろう。

特に当該資料を考える際に重要なことは、土偶などのように数千点いや数万点も出土している





手形付土版（右手，表）



手形付土版（右手，裏）



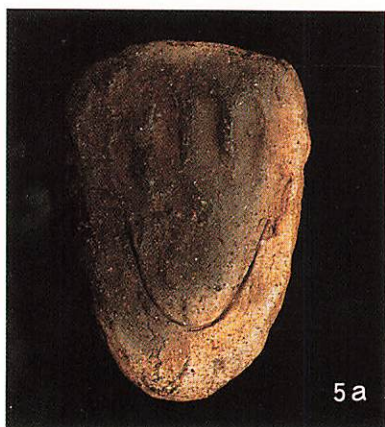
手形付土版（右手）



手形付土版（左手）



足形付土版（右足）



手形付土版（左手，表）



足形付土版（右足，裏）

写真30 青森県出土の
手形付土版と足形付土版

1~4 大石平遺跡出土
(写真提供 青森県埋
藏文化財調査センター)

5 中平遺跡出土
(写真提供 八戸市博物館)

ものではなく、下表のように両方あわせても20点程しか類例がないという点である。縄文土器や土偶を製作することからみれば、わずかな粘土でかつ短時間で製作可能であるにもかかわらず何故にこれほど珍品なのであろうか。誰もが残したものではなく、非常に稀にしか残されなかったものであるということになる。

次にさまざまな可能性について考えさせてくれる主要な当該資料について検討したい。中平遺跡の表裏に左手・左足を付した土版は、左右に傾斜する2孔の貫通孔を有しており、幼児に背負わせた可能性を彷彿とさせる唯一の土版である。中平遺跡では、いずれ右手・右足を表裏に付した土版が出土するかもしれない。西海淵遺跡出土の左手の土版裏面には、大人の手形（左手とみられる）が斜めに付されており、子供の手形を付すために押さえた跡であると考えられるものである。上山遺跡出土の足形付土版にも土踏まずにあたる部分に2孔あり、懸垂して吊り下げるといって他の当該資料とは異なっている。

地域的には東北・北海道に限定されている現状であるが、時期的にはほぼ縄文時代の全期間に跨がっている。縄文早期あるいは前期の当該資料が今後とも東北地方で出土しないということになれば、北海道の縄文文化の中から成立したと解釈されることになる。

入舟遺跡の本報告での再考を約して、ひとまず擱筆する。 (宮 宏明・齊藤麻紀)

手形付土版の類例

都道府県	市町村	遺 跡 名	時 期	出土点数	備 考
北海道	余市町	いりふね 入舟遺跡	縄文後期	2 点	右手・左手、日本最大、同一人物とみられる両手の出土は初
青森県	六ヶ所村	おおいしだい 大石平遺跡	縄文後期	3 点	右手・右手・左手、1995年重要文化財指定
山形県	村山市	さいかいふち 西海淵遺跡	縄文後期	1 点	左手、裏面に大人のものとみられる手形あり

手形・足形付土版の類例

青森県	三戸町	なかだいら 中平遺跡	縄文後期?	1 点	表裏に左手と左足あり、2孔あり
-----	-----	------------	-------	-----	-----------------

足形付土版の類例

北海道	余市町	いりふね 入舟遺跡	縄文後期	2 点	右足・左足、両足とも欠損
北海道	千歳市	びび 美々5遺跡	縄文前期?	2 点	右足・左足、左足は墓壁伴出例
北海道	千歳市	びび 美々7遺跡	縄文早期	2 点	左足・?足、2点とも墓壁伴出例
北海道	苫小牧市	みさわ 美沢3遺跡	縄文早期	2 点	右足・左足、2点とも墓壁伴出例
北海道	木古内町	しんみち 新道4遺跡	縄文後期	1 点	右足、土踏まず側を欠損
青森県	六ヶ所村	おおいしだい 大石平遺跡	縄文後期	1 点	右足、1995年重要文化財指定
青森県	六ヶ所村	かみおふち 上尾駸(2)遺跡	縄文後期	1 点	左足、2ヶ所を欠損
青森県	名川町	こくそう 虚空蔵遺跡	縄文晩期	1 点	右足、土踏まずから踵部分を欠損
秋田県	鹿角市	おおよ 大湯環状列石	縄文後期	1 点	右足、指先部分を欠損
岩手県	滝沢村	ゆふねざわ 湯舟沢遺跡	縄文後期	1 点	左足、指側のみ残存
新潟県	山北町	うえやま 上山遺跡	縄文後期	1 点	右足、1971年重要文化財指定

文 献

- 青森県教育委員会 1978 「三内澤部遺跡発掘調査報告書」
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 1992 「青い森の縄文人とその社会—縄文時代中期・後期編」
図説ふるさと青森の歴史シリーズ②
- 天羽利夫 1965 「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」 【史学】 第37巻第4号
- 岩手県立博物館編 1993 「じょうもん発信」第8回国民文化祭記念 第37回企画展図録
- 上原甲子郎 1961a 「7. 新潟県上山(うえやま)遺跡の調査」 【日本考古学協会第27回総会研究発表要旨】
日本考古学協会
- 上原甲子郎 1961b 「資料紹介 巻貝形土製品(口絵解説)—新潟県・上山遺跡出土—」 【考古学雑誌】 第47巻第3号
日本考古学会
- 遠藤香澄ほか 1989 「美沢川流域の遺跡群 Ⅻ」 北海道埋蔵文化財センター
- 遠藤正夫 1986 「青森県大石平(1)遺跡出土の「手形付土版」・「足形付土版」」 【考古学雑誌】 第71巻第4号
日本考古学会
- 遠藤正夫 1987 「手形付土版・足形付土版」 【大石平遺跡 Ⅲ—むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書—】
(第1分冊) 青森県埋蔵文化財調査報告書第103集 青森県教育委員会
- 岡田淳子ほか 1977 「日本子どもの歴史 1 —夜明けの子ども—」 第一法規出版
- 鹿角市教育委員会編 1995 「特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書」(11) 鹿角市文化財調査資料52
- 熊谷常正 1986 「滝沢村・湯舟沢遺跡の足形付土製品について」 【湯舟沢遺跡】
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 黒坂雅人 1992 「8. 山形県村山市西海淵遺跡」 【日本考古学年報】 43 日本考古学協会
- 苫小牧市博物館編 1995 「大昔の苫小牧—よみがえる古代人のくらし—」 第33回特別展
苫小牧市博物館・苫小牧市埋蔵文化財調査センター開館10周年記念
- 長沼 孝 1993 「土版と土面から推理する—足形付土版とママチ土面の世界—」 苫小牧市博物館 第25回文化財講座
- 名川町教育委員会編 1978 「虚空蔵遺跡発掘調査報告書」
- 八戸市博物館編 1990 「特別展 縄文人の世界—縄文後期の生活と文化—」
- 春成秀爾 1985 「子どもの考古学(第13回歴博講演会)」 【歴博】 第10号 国立歴史民俗博物館
- 平沢弥一郎 1981 「直立歩行を支える左足」 【サイエンス】 1981年6月号
- 平沢弥一郎 1984a 「足跡が語る古代人」 【埋文あおもり】 第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 平沢弥一郎 1984b 「保健体育—新しい人体論—」 放送教育開発センター
- 平沢弥一郎 1988 「足形付土版について」 【上尾駁(2)遺跡Ⅱ】 青森県教育委員会
- 平沢弥一郎・臼井永男 1993 「幼児の足跡土版の発見」 【保健体育—スタシオロジー—】 放送大学教育振興会
- 北海道教育委員会編 1979 「美沢川流域の遺跡群 Ⅲ」 北海道文化財保護協会
- 北海道埋蔵文化財センター編 1987 「木古内町 建川2・新道4遺跡」
- 北海道埋蔵文化財センター編 1993 「美沢川流域の遺跡群 XVI」
- 馬目順一 1967 「入手を表現した一土器片」 【月刊考古学ジャーナル】 No13 1967年10月号 ニュー・サイエンス社
- 水野正好 1979 「足と足跡の語るもの—その印象と造形の考古学—」 【月刊文化財】 1979年1月号 第一法規出版
- 皆川洋一ほか 1992 「美々7遺跡」 【美沢川流域の遺跡群 XV】 (第1分冊) 北海道埋蔵文化財センター
- 森山泰太郎 1965 「津軽民俗」 郷土を科学する第1集 陸奥新報社
- 余市町教育委員会 1995 「余市町の埋蔵文化財」 No24 「入舟遺跡 手形付土版」